

| | |
|------------------|---|
| Title | 『慶應義塾史事典』：「調べる」と「読む」との両立 |
| Sub Title | The Keio Encyclopedia: uniting the pleasure of finding things out with the pleasure of reading |
| Author | 井上, 琢智(Inoue, Takutoshi) |
| Publisher | 慶應義塾福沢研究センター |
| Publication year | 2011 |
| Jtitle | 近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011.), p.211- 226 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 特集2：事典がひらく新たな世界 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0211 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『慶應義塾史事典』——「調べる」と「読む」との両立——

井上 琢智

ご紹介いただきました関西学院大学経済学部の井上です。現在関西学院の学院史編纂室の室長をさせていただいています。最初このお話を頂戴したときには正直申しますと、注文はしてあったのですが、本がまだ手に入っていませんでしたので、お送りいただいたあとすぐに読ませていただきました。最初お断りしたのは、私は福沢研究者ではありませんので『福沢事典』についてのコメントは十分にはできないということです。ただ、ご紹介いただきましたように、私は『関西学院事典』の編集に携わった経験もあり、その立場からお話をさせていただきたいということで、ご了解を得てここにまいいっております。

【I】 背景

1、創立記念事業の一貫としての出版

関西学院は、慶應義塾から三一年遅れた一八八九年に創立されましたので、四年後にやっと一二五周年を迎える学校です。関西学院も百周年を迎えるにあたって——お手元のレジュメを急いで書きましたので、誤字、脱字があると思いますが、お許しくださいと思います——『関西学院の一〇〇年』という写真集を兼ねた図録を出版しました。この百周年記念事業として正史を出版できなかったのはその直前まで、関西学院は法人と大学とは、校地の取得をめぐる対立していました。したがって、百周年の記念事業として正史の出版は不可能だと分かっていたので、この図録を出版することになりました。この写真集をも兼ねた出版物は関西学院ではじめてでしたので、それなりの意義がありました。百周年事業後、正史の編纂が開始されました。のちに学長になりました柚木学という日本経済史の専門家を責任者に、まずは「資料集」の出版を決め、その後それを使って「年史」を書くことになりました。完結したのは一九九八年でしたので、ほぼ一〇年要して全四巻が完成しました。途中で九六年の阪神・淡路大震災もあって、完成が遅れましたが、何とか出版できました。まさに、一一〇周年の年でした。ところで、この四巻本ですが、その箱には工夫がこらされています。箱の背にある写真は、関西学院の上ヶ原キャンパスの春・夏・秋・冬の豊かな自然を撮った写真が印刷されています。ご覧頂ければと思います。

ところでその刊行時には、すでにキリスト教主義学校として西暦二千年に「一一一周年記念事業」の実施が決まっていました。その中で公募事業があり、当時の学院史資料室、現在の関西学院史編纂室が公募に応じて『関西学院事典』の出版を提案しました。いったん却下されたのですが、最終的には事業として採用されました。

実はこの『関学事典』構想は、すでに正史編纂中にもありました。しかし、資料編纂・正史執筆と事典の編

纂とを同時に実施することは不可能でしたので、結果的には一一一周年事業に応募したことになります。事典の出版を意図したのは、資料集・正史は大部ゆえにおそらく全体を読む人はいないと想定できましたので、事典の形式をとることで、「誰でもがどこでも引ける、読める」ものを目指しました。この『関学事典』は各部署に配布され、またいわゆる自校史の「『関学』学」の参考文献として生協でも市販され、学生にも読まれるようになり、関西学院の歴史を知っていただくための大きな役割をはたしたと思っております。ちなみにこの『関学事典』の箱の背には神戸三田キャンパスの写真を使っています。

このような現状にあつて、一二五周年を迎えようとするいま、法人から「一二五周年の正史」の編纂の提案もありました。しかし、現時点では一二五年の正史は書けないとして、学院編纂室はその提案をお断りして、逆にこの『関学事典』の「増補改訂版」の編集を逆提案しました。『関学事典』には、やはり誤字も脱字もありますし、慶應と同じように、この間に関西学院も合併や学部新設が続き、その規模が大きくなりました。とはいえ、もちろん慶應とか早稲田に比べればまだ小さいのですが、それでも規模が大きくなると、小規模でやってきた関西学院では考えられなかったのですが、しだいに意思疎通が十分でなくなってきました。このような問題を解決する一助ともなればと思い、その「増補改訂版」の出版を提案しました。

このような関西学院の状況のなかでこの『義塾史事典』が出版されました。

2、自己点検・評価システムの導入と建学の精神の明示化

実はこの『関学事典』を含む大学史・歴史事典の位置づけを考えると、二つの大きな流れから位置づける必要があるだろうと思っております。一つは、「自己点検・評価システム」の導入の流れです。これは、大綱化

以後始まり、現在では義務化され、建学の精神が問題にされています。もちろん慶應義塾や関西学院のように歴史的に建学の精神が明確な大学がある一方、旧国立大学のように必ずしもそれが明確でなかった大学があります。この自己点検・評価というシステムは、それぞれの大学の建学の精神と、それがその後どのように継承され、そして現在に活かされているかということを、点検・評価することですので、どうしても自校史を明らかにし、その一環として『事典』の編集もまた意味をもつと考えています。

したがって、私たちが大学基準協会で評価を受けたのですが、その資料として各学部の「学部史」も提出しています。たとえば、経済学部は『五〇年史』と『七〇年史』を、また、他の学部のそれぞれ学部史を出版しています。最近では、設置五十年を迎える社会学部と理工学部が、また大学図書館も館史の出版を準備しています。おそらくこれほどまでに学部史を出版している大学はないと思います。関西学院の年史編纂の特徴は、おそらく学部ごとが、学部史をつくりながら、そして大学史全体につながっています。その先導の役割を果たしたのは経済学部です。しかし、いずれにせよ学校史や学部史が自己点検・評価の資料としておおいに役だっているということなのです。

3、「自校教育」の高まり

もう一方で、それは最初の大きな流れに関わっていますが、最近よく言われる「自校教育」重視の流れでの位置づけです。レジメに書きましたが、私も日本大学から求められてこれに関する一文を寄せましたが、この「自校教育」もまた先ほど申しました建学の精神をいかに現在の学生に伝えるかということにかかわっていると思います。

レジメの【参考1】を御覧いただければと思います。関西学院大学では、実は『関西学院百年史』の編纂のなかで、先ほど申しましたように『関西学院事典』をつくるという目的と同時に、それを利用して学生に関西学院の歴史を伝えようという提案があり、これまで実行してきました。それが一九九五年から毎年半年間の授業で、その名称やカリキュラム上の位置づけには変化がありますが、現在の名称で言うと『関学』学という名称での授業です。テーマはそこにありますようなさまざまなテーマで、関学の歴史を学生さんに伝えており、多くの講師の方々が担当し、コーディネーターが全体を統一しながら授業します。受講の学生数はレジメをご覧ください。関西学院大学では、現在のように「自校史」と声高に言われる以前から、学生の規模が少しずつ大きくなることで、校歌すら歌えない学生をどうするかということもふまえて、このような授業を開始したわけです（【参考2】『関西学院事典』刊行に際して、『朝日新聞』と『読売新聞』が、この事典の意義を紹介する記事を書いていただきました。ご覧ください）。

この大きな流れのなかで、現在もおお単位は非常に甘いのですが、それは、この授業を通じて少しでも多くの学生さんに関西学院のことを知ってほしいということに意義を認めているからです。このように五七七人の学生がいて、なおかつ『関学事典』が持ち込み可という試験（笑）です。ただし、この本の定価は五千円と高いので、法人の理解のもと、生協に譲渡し二千五百円で販売しています。年間に大体五、六〇冊は売れるようです。

【Ⅱ】『義塾史事典』『福沢事典』の刊行の意図等

このような大きな流れのなかで、私たちはいま『義塾史事典』と『福沢事典』を目にしています。『関学事典』がまさにハンディな、もったもハンディにならざるを得ないほど書くべき項目がなかったことも事実ですが、それに対して慶應ではこのような大部なそしてほぼ同時に二つのテーマを扱った事典が出版されたことは、私には非常な驚きでした。

1、『慶應義塾一五〇年史資料集』の一貫

すでに西沢さんからご紹介がありました。が、歴史編纂にとつてやはり資料集編纂がいちばん重要であるということはたしかです。したがって、私たちが「資料集」を最初に編纂しました。しかし、「資料集」としては、残されている資料をすべてコピーして印刷するのがいちばんいいのですが、そうはいきませんので、何らかの歴史観に沿って取捨選択する必要があります。そのためにはその歴史観が問われます。その点でやはり取捨選択が非常に困難です。とくに関西学院の場合には、戦前の理事会記録すべて手書きの英文で書かれていますので、それを読むのに宣教師にそれを全部読んでいただいて、重要と判断された箇所を抜粋コピーして、それを資料集に利用するという作業をしました。

多くの学校でこのようにいわゆる「資料集」の編纂をしています。が、慶應がその一貫として二冊の『事典』を編纂・出版されたことに対し敬意を表したいと思います。

2、「自我作古」^{われよけいにしてをなす}の精神

『義塾史事典』も『福沢事典』も、その記述が福沢自身の言葉等を使いながら書かれているということですが。例えば、これらの歴史的考察は福沢が重視した「自我作古」がその根拠とされており、今なお慶應が福沢の言葉や思想をいかに大切にしているかが分かります。だからこそ、この二冊の『事典』は、単独では出版できないものであり、車の両輪のように、二冊ではじめて慶應義塾のすべてを知ることができるのだということを実感させられました。

3、「調べる」ということと、通して『読む』という二つの面…のバランス…に腐心

『義塾史事典』も『福沢事典』も、「調べる」ということと、通して『読む』ことという二つの目的を実現するために、編集・執筆に際して、そのバランスに腐心したと書いておられます。『関学事典』もそうですが、一般的に事典は「調べる」ことが中心ですので、「読む」ことには堪えられません。しかし、『義塾史事典』も『福沢事典』もその点で成功しているのではないのでしょうか。想定される読者にとっては、「通読」には二冊ともあまりにも大部すぎることは多少難点かもしれませんが。

慶應義塾には「関学」学」に相当する自校史の授業はあるのでしょうか。そこにこの二書が試験に際して持ち込みが許可されたとしても学生さん困りますね。一つのアイデアなのですが、この二冊の事典を電卓のデータとして組み込んだ「慶應義塾電卓」を販売されたら便利ですね。事典の役割の一つがハンディさにあるとすれば、研究者でもずいぶん助かりますね。家でしか読めないということは、通読にはやはり不便ですね。ぜひ

出版会の方にお願したいのですが、今風に電子ブックとしての販売や慶應義塾のホームページにその内容も載せていただき、誰でも読めるようにしていただくと、私たちににとっては非常にありがたいのですが。でも、事典としての販売の視点からは今は難しいでしょうね。

4、想定する読者

もう一つの編集方針は、高校生も読めて、しかも専門家の方にも満足しておられるもの、これもたいへん重要だろうと思っています。とくに慶應義塾は日本の私学のトップをいろんな意味で走っている学校の一つです。その意味ではこの学校に憧れ、そしてこの学校に入学したい人もおられるし、同時にこの学校の生き方を私たち私学関係者も学びたいと思いますから、この視点は重要です。関西学院も初期から慶應義塾と比較し、追い付こうとしています。例えば、慶應に万巻の図書があるが、関学には一千冊しか本がないと。

その点では『義塾史事典』も『福沢事典』も生徒・学生・同窓さらには専門家だけでなく、社会人や私学関係者にも読んでいただけるものになっていると思います。

5、『事典』・執筆者の特徴

執筆者についても特徴があります。それは「記名入り」執筆であるということです。『関学事典』では出来なかったことですが、それは、各『事典』の執筆者を明確にすることで執筆の責任を明確にするという点で、きわめて重要な意味があると思います。

【Ⅲ】人名索引に見る『義塾史事典』と『福沢事典』——共通人物「あ」のみの事例——

『義塾史事典』と『福沢事典』の位置づけや特徴をこのように指摘させていただいたうえで、いくつか気付いた点をコメントさせていただきます。

最初に「人物」について気づいた点を挙げてみたいと思います。私の専攻が経済思想史ですから、やはり人物が気になります。全体を取り扱うべきなのですが、十分検討する時間をとることができませんでしたので、「あ」だけを取り扱いました。

1、『義塾史事典』と『福沢事典』双方に登場する人物について——多面的な評価と異なる生没年表記——

例えば、「朝吹英二」の場合、『義塾史事典』と『福沢事典』双方で同じ写真を用いて「実業家」として評価されています。逆に、例えば「阿部泰蔵」の場合、『義塾史事典』では「日本最初の生命保険会社明治生命の創業者、慶応義塾長」とあり、『福沢事典』では「教育者、実業家」とあり、評価の違いがあります。もちろん筆者の違いが評価の違いを生んでいるのですが、このような評価の違いというのが、研究者にとっても、おそらくは読者にとっても興味深いものであり、読者のさらなる研究に導くことが期待されます。また、人物はもろんですが、多くの項目に必要な写真が取り入れられている点は読者に親切であり、通読する意欲をサポートすることになります。阿部の場合には写真も異なっていますが、それも興味を引くことでしょう。写真を多用することはやはり重要なことでして、『関学事典』の場合でも、掲載の努力をしてみました。写真の入

手は難しいのですが、その努力を最大限されたことに対して敬意を表したいと思います。生没年の表記については、『義塾史事典』では、「嘉永二〜大正七（一八四九〜一九一八）年」とあり、『福沢事典』では「嘉永二（一八四九）〜大正七（一九一八）年」と微妙な違いがあります。

2、『義塾史事典』と『福沢事典』における人物の扱いの相違

それから「あ」だけを見ますと、二つの間にもちろん趣旨が違いますので、当然のことではありますけれども、入っている人、入っていない人があります。たとえば、『義塾史事典』の「足立寛（藤三郎）」の場合には、『藤三郎』が追記されていますが、『福沢事典』では独自の項目がないだけでなく、索引の「足立寛」だけで「藤三郎」とは明記されていません。せめて表記だけは統一していただいたほうがよかったですかと思っております。そしてこの場合には、出来ればですが、『福沢事典』の索引の中で『義塾史事典』参照」とでも特記していただければ読者には親切だと思います。もつとも最初にお話しましたように、これら二冊が電子事典となつて、索引が共通化すれば、この難点は無くなると思います。この指摘は決してあら捜しではなくて、読者がどちらかを読んだときに、明治期の方とはとくに複数の名前を持つておられる方がいますので、可能な限り異名をも収録していただければ読者に親切であつたように思います。

また、先の朝吹英二の妻澄ですが、『義塾史事典』・『福沢事典』双方に単独の項目立てはありませんが、前者の索引ではたんに「朝吹澄」とあるだけです。後者の索引では「朝吹（中上川）澄」と書かれており、慶應義塾にとつても、金融史にとつても重要人物である中上川彦次郎の関係者であることが分かり、本文へ立ち戻る契機となります。このような場合でも、可能な限り人間の関係が分かるように索引等での工夫が望まれます。

す。

【Ⅳ】「調べる」の試みと「調べた」成果

1、「慶應義塾大学」は(1)何時、(2)なぜ Keio-gijuku University でなく、Keio University と書かれるようになったか？

「義塾」という名称が明治期の学校史にとって意義深いものであると思っていた私は慶應義塾大学の英語表記にその「義塾」が見あたらないのに気づいてその理由を知りたいと思って調べてみました。しかし、その理由を『義塾史事典』にも『福沢事典』にも見つけることができませんでした。何時、なぜ、英語表記には「義塾」がないのでしょうか。どこでオーソライズされたのでしょうか。日本語表記と英語表記が異なるということは、慶應義塾大学と Keio University とは異なる学校だと誤解される危険性があります。外国人は「義塾」を発音しにくいという理由で削除されるようになったのかどうかなど、この名称変更の理由は私にとっては非常に気になります。

例えば、「桃山学院大学」は英語名を「セント・アンドリュース・ユニバーシティ」と言います。それはこの大学が聖公会系の大学ですから仕方がないと思いますが、やはり誤解が生まれ、混乱する可能性があります、できるならば避けるべきだと思いますが、読者には説明があった方がいいのではないのでしょうか。

それとの関わりで言いますと、「組織名英語表記」一覧がありますが、「定まった英語表記がない組織は省いた」とあり、この点の整備が不十分だということになります。このように考えると、『義塾史事典』にせよ

『福沢事典』にせよ、このような事典編集がまさに自己点検・評価の場となっていることが分かります。

2、「理事会」・「大学評議会」

『義塾史事典』には「理事会」や「大学評議会」の項目はありません。ただ、私の視点から言いますと、理事会の構成員がどのように歴史的に変遷になったかということは——もちろん『百年史』を見れば書いてあるのでしょうか、時間がなくて見ていませんが——学校経営上きわめて重要だと思えます。例えば、同窓生が理事会に何名入っており、現役教員は何名入っており、それぞれ何%であるか、また大学評議会に学部代表がどの程度入っているのか、といった説明があれば読者に親切であったと思います。

3、「ペンマーク」・「エンブレム」

「ペンマーク」「エンブレム」ですが、さまざまな種類が紹介されています。おそらく、現在のものについては、ガイドラインでなおかつ商標登録がされていますが、具体的に色番号や基本サイズなどが書かれておりません。細かいことと言って申し訳ないですが、そのような情報が書かれてあれば、より分かりやすいし、例えば、学生が自分のクラブの部旗をつくるときに、その色がコードの色番号何番だということがわかれば、便利だと思つてのことです。

4、「学期の変更」・「セメスター制の導入」

次ですが、さらに細かなことになりましたが、慶應義塾では九月入学から四月入学に変わったのはいつからで

しょうか。また、セメスター制が採用されているのでしょうか。セメスター制の意味はいろいろあると思いますが、いつから採用されたのでしょうか。『義塾史事典』には、見落としているかもしれませんが、書かれていないように思います。このように学生にとって重要な変更が何時から、出来ればなぜ採用されたのかの説明があれば、読者には便利ではないかと思っています。

5、福沢家の系譜図

福沢家の系譜図は『福沢事典』には入っていますが、『義塾史事典』にはありません。基本的な情報です。で、双方に書かれておれば便利だったと思います。

6、「歴代役職者一覧」

歴代役職者ですが、出来れば出版時点での役職者が書かれてあればよかったです。先生が書かれていません。

7、尹致昊（朝鮮留学生）

7、8は私の関心事です。先ほど研究員の方とお話したんですが、「尹致昊」が出てきたのには少し驚きました。尹致昊は『義塾史事典』で日本最初の朝鮮からの留学生として出てきますが、創立期の関西学院にとっても重要な人物です（木下隆男「関西学院と『尹致昊日記』」『関西学院史紀要』第七号、二〇〇一）。少しお話をしましたので内容はわかりましたけれども、すでに資料として研究員の方が十分お読みになっている『尹

致晁日記」が「資料」の中に書かれていません——このような例はほかのところでもありますが——研究に堪える事典にするためには、より多くの研究文献の紹介が「参考資料」の中にあつたほうが、よかつたと思ひます。

8、範多竜平（ゴルフ部） E・H・ハンターの長男範多竜太郎の長男

それから「範多竜平」が出ていたのには驚きました。ゴルフ倶楽部の方だそうです。ご承知のようにこの方は日立造船のもとになった大阪鉄工所やハンター商会の創業者で神戸の洋館として有名なハンター邸——関西学院大学発祥地である現在の神戸市立王子動物園の横に移築されています——のE・H・ハンターさんのお孫さんにあたります。以前ハンターの調査をしたことがあります、そういう方が慶應でゴルフ倶楽部をつくつたということは、非常に私にとっては興味のあることであります。

時間がありませんので、もう簡単にさせていただきます。

【V】『義塾史事典』の新たな試み

1、生徒・学生の利用の利便さ

重要なことは、今回出版された『義塾史事典』や『福沢事典』がより多くの生徒・学生に使っていただく必要があるということです。慶應義塾の『三田評論』によれば、湘南藤沢中・高等部の総合学習では福沢が教材になっているようですし、大学でも自校史の科目が開講されていると思ひますので、それらを受講している生

徒・学生が自由に使えるような新たな試みを、PCなどいろいろな現代の利器を使ってやっていただくと、よりのいいのではないかと思います。

そのためには、慶應義塾大学出版会の採算の問題がありますが、より安価に『義塾史事典』と『福沢事典』が入手できるようにしていただく必要があると思います。慶應義塾関係者へ特価を付けて販売するというのはいかがでしょうか。

2、索引

全項索引の作成はきわめて困難だと思えますが、PCなどを使えば不可能ではないかと思えますし、その際にはぜひ『義塾史事典』と『福沢事典』双方の相互検索システムを作っていただければありがたいと思えます。また、直接索引には関係ないことだと思えますが、一点だけお聞きしたいことがあります。『義塾史事典』と『福沢事典』の人名索引を見て感じたことですが、これらの事典編纂に際して、どのような基準で人物を選ばれたのかということです。私たちも『関学事典』編集に際しても非常に苦心しました。この方を入れてこの方を入れないとなると、あとから揉めますので、どのような工夫をされたかをぜひお聞きしたいと思えます。

6、「むしろ義塾史についても『多事争論』(『文明論之概略』)がふさわしい」

最後です。レジメにはいろいろ書いていますが、先ほど西沢さんからお話がありました。が、「正史を書かない」ということ、一五〇周年事業としては書かないということ、だとは思いますが、その理由の一つに、

福沢の「多事争論」(『義塾史事典』)と『福沢事典』の事項索引には登場せず、後者の「五 ことば」の「ことば一覽」には書かれています)が根拠となっています。しかし、すでに『百年史』を書かれた慶應義塾にとつて、正史はあるわけで、「多事争論」ゆえに「正史は書かない」とされた意味が理解しにくいということですが、たしかに「創立二〇〇年以降の資料の収集・整理は、必ずしも十分ではない」——むしろ資料がありすぎて、歴史による選択がなされていない——ということはおそらくわかります。しかし、正史を執筆することの意味はやはり私は否定すべきではないかと思っています。つまり資料整備ができれば「多事争論」を生み出すためにも、必ずそれぞれの時代の求める正史を書くべきだと思っています。論争を巻き起こすことによって、より正しい、そして将来の慶應義塾のあり方を示すためにも正史を書いていただきたいと思えますし、今回の『義塾史事典』も『福沢事典』も、そのための「収集・整理された」資料になるであろうと信じています。『一五〇年史』を書かれないのですから、次の正史は『二〇〇年史』かもしれないけれども。

ちよつと時間が過ぎて申し訳ございません。これで終わらせていただきます。